

2月1日 年間第4主日

申 18:15～20 Iコリ 7:32～35 マコ 1:21～28

1. マコ

v.22 「人々はその教えに非常に驚いた。律法学者のようにではなく、権威ある者としてお教えになったからである。」

キリスト者と称する人々の中には、司祭や奉仕者をも含めて、今日でもなお、キリスト教の目的はイエスの教えを基礎にして、ある種の理想の世界を建設することだと思っている人たちがいます。イエスは当時の並のレベルの教師のようにではなく、現代の超一流大学の教授のように教えたのであるから、その教えには普遍的な権威があって、当時の人々を驚かせただけではなく、現代人のすべても特別な尊敬を払う価値があると、彼らは考えているのです。

共観福音書の支配的とも言うべき中心主題は、神の国です。イエスの宣教は、「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい」(マコ 1:15)という言葉で始まっています。ひどく乱用されて来たこの“神の国”という言葉は、言語学的には“王としての神の支配”を意味していて、決して地上のある特定の国家や体制のことでありません。聖書の神は、歴史を働き場所とし、定めた終末を目指して、恵み豊かな目的を遂行しつつある神です。ですから“神の国”は先ずダイナミックな“歴史における神の行動”であり、そして当然“終末論的”に、すなわち歴史の最後の完成を目指すものとして理解されねばなりません。

この神の国が“近づいた”とは、しばしば誤解されるように“まだ来ていない”という意味ではなくて、終末の完成の日を目指す“王としての神の支配”が今や始まった、今や進行中である、という宣言に外なりません。かつて第二イザヤが、大いなる待望をもって預言した「あなたの神は王となられた」(イザ 52:7, 40:9-10 参照)という“時”が、それから500年以上を経て遂に“満ちた”ことを、イエスは教え始められたのです。

イエスが悪霊払いをはじめとする奇跡を数多く行われたことが、福音書には書かれています。マルコ福音書を例にとれば、実にその三分の一の節(全体で661節の内209節)が、直接間接に奇跡を扱っています。イエスの教えと業は、神の国の開始の業そのものであって、それが人々を驚かせ、あるいは混乱させ、また見る目を持った人には“しるし”でありました(ルカ 11:20,30)。

イエスの初期のカリヤ伝道は、その初めから「地上に火を投ずる」(ルカ 12:49)ものであったのです。

2. Iコリ

v.35 「このようにわたしが言うのは、あなたがたのためを思っていることで、決してあなたがたを束縛するためではなく、品位のある生活をさせて、ひたすら主に仕えさせるためなのです。」

主イエスが、「多くの人の身代金として自分の命を献げる」(マコ 10:45)主の僕として十字架に死に、信

じる者を義とするために復活させられたとき(ロマ 4:25)、かつては“秘密”(マコ 4:11)であった神の国は、今や教会の信徒たちにとって、「力にあふれて現れる」(マコ 9:1)将来の完成を待つ神の国となりました。

復活の勝利、聖霊の降臨、使徒たちの教会の誕生という出来事によって、神の国の業が完結してしまっただけではありませんでした。「主は、生者と死者を裁くために、栄光の内に再び来られます」(ニケア・コンスタンチノーブル信条)(使 10:42, 17:31、1テサ 1:10 参照)という信仰こそが、キリスト者のミサと、その生活上の倫理の土台となったのです。

3. 申

v.15 「あなたの神、主はあなたの中から、あなたの同胞の中から、わたしのような預言者を立てられる。あなたたちは彼に聞き従わねばならない。」

典礼憲章は、私たちのミサの中で「キリストは自身のことばの内に現存している。聖書が教会で読まれるとき、キリスト自身が語るのである」(7)と宣言しています。かつてユダヤ人の住む地で、イエスは自ら人々に神の国の福音を語られました。それなのに、なぜ今は司祭や奉仕者を通して私たちに語られるのでしょうか。それに対する答のヒントが、vv.15-18にあります。それは 申 5:23-29 を指していて、申命記による祭儀(典礼)理解がそこには示されています。

私たち会衆がミサで神の国の福音をしっかりと聞き取る責任と、司祭がことばの典礼で……自分の思想や主義を語るのではなくて……神の国の福音を語るという責任の重さを、理解しなければなりません。「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい。」(マコ 1:15) それは聖書という書物の中にあるただの昔話ではなくて、今なお現代のキリスト者に語られている、現在の神のことばなのです。

ハレルヤ、アーメン。

2月8日 年間第5主日

ヨブ 7:1～7 1コリ 9:16～23 マコ 1:29～39

1. マコ

v.33 「イエスは、いろいろな病気にかかっている大勢の人たちをいやし、また、多くの悪霊を追い出して……」

v.39 「そして、ガリラヤ中の会堂に行き、宣教し、悪霊を追い出された。」

イエスの宣教は、神の国の開始でありました。初期のガリラヤ伝道におけるイエスを、永遠の知恵の真理を群衆に教える高貴な魂を持った教師のように想像するなら、それは間違っています。聖書に書かれている奇跡や教えを割引して考え、これをおとぎ話のように読むときにだけ、そのようなイエス像が出現して来ます。

今朝の福音書のテキストからは、神の国が悪霊の支配に対する戦いであり、イエスが攻撃の先頭を切って進んで行かれる様子が、非常に明確に読み取れます。

神の国の王は父であって、イエスが御自身の祈りの中で「アッバ、父よ」(マコ 14:36)と呼ばれた方です。

v.35 「朝早くまだ暗いうちに、イエスは起きて、人里離れた所へ出て行き、そこで祈っておられた。」

イエスは、神がすべての人の父であるとは教えませんでした。19世紀の自由主義的な聖書解釈者が主張した“神はすべての人の父であり、人はみな兄弟である”というのは、イエスの教えではありません。イエスは神を自分の父であると語り、人々には「わたしを通らなければ、だれも父のもとに行くことは出来ない」(ヨハ 14:6)と教えました。

主の復活と昇天の後、父と子と聖霊の名によって洗礼を受ける人々には神の子とする霊が注がれて、人は「アッバ、父よ」と呼ぶようになりました(ロマ 8:15、ガラ 4:6)。父なる神が歴史に外側から介入して、悪魔の支配から御自分の民を救い出して行かれる、それが御子イエスの宣教と御業でありました。ですからヨハネは、ずっと後になって、イエスの生涯を振り返って、「悪魔の働きを滅ぼすためにこそ、神の子が現れたのです」(ヨハ 3:8)と書きました。

2. ヨブ

v.7 「忘れないでください、わたしの命は風にすぎないことを。」

罪という言葉で、人がたまたま何か間違っただけをしてしまったというような、単なる個人的な過ちと考えるなら、ヨブはこのように苦悩しなかったことでしょう。ヨブがどんなに抗弁しても、神は強く、彼は罪ある者とされる(9:19-20 参照)。罪とは、人を聖なる神から隔てる障壁であって、神がこれを取り除いてくださる以外には救いはないのです。人は自力でこの罪の問題を解決することが出来ないのです。

「人は皆、罪を犯して神の栄光を受けられなくなっていますが、ただキリスト・イエスによる贖いの業を

通して、神の恵みにより無償で義とされるのです。」(ロマ3:23-24) これが、使徒パウロの宣べ伝えた福音でした。イエス・キリストの救いを受けるまでは、私たちは皆「生まれながら神の怒りを受けるべき者」(エフェ2:3)、「罪のために死んでいた」(同2:5)者であったことを、知ることが大切です。

このような罪の深い理解なしには、キリストの福音が与える救いを正しく理解することは出来ません。キリストの福音は「救いをもたらす神の力」(ロマ1:16、エフェ1:13)だからです。

3. I コリ

v.23 「福音のためなら、わたしはどんなことでもします。それは、わたしが福音に共にあずかる者となるためです。」

使徒パウロはその手紙の中で、200回以上も「キリスト・イエスに結ばれている」という言葉を使っています。恐らくこの言葉は、「洗礼を受けてキリストに結ばれた」(ガラ3:27)から生まれたものと考えられます。福音にあずかるとは、洗礼を受けてキリストの共同体の一員となることであって、この教会こそが神の国を受け継ぐ「キリストと共同の相続人」(ロマ8:17)だからです。

彼が使徒として召されたとき、天上のイエスは「わたしの名のためにどんなに苦しまなくてはならないかを、わたしは彼に示そう」(使9:16)と言われました。やがて彼は、「わたしは使徒たちの中でもいちばん小さな者であり、使徒と呼ばれる値打ちのない者です」と言いながらも、「わたしに与えられた神の恵みは無駄にならず、わたしは他のすべての使徒よりずっと多く働きました」と、感謝の言葉を述べるに至ったのでした(15:9-10)。

私たち教会は、これらの使徒たちを通して今も福音を聞き、救われた民の共同体である「キリストの体を造り上げてゆき」ます(エフェ4:12)。実に教会の宣教は、現代においても、使徒たちの宣教の継続であって、それは、イエス・キリストが開始された神の国がその再臨によって完成する日まで、続いて行くのです。ですから、この教会の宣教と共にいてくださる主(マタ28:20)が私たちに励まして、使徒パウロと同じ心になしてくださいように。

v.16 「福音を告げ知らせないなら、わたしは不幸なのです。」

ハレルヤ、アーメン。

2月15日 年間第6主日

創 3:16～19 Iコリ 10:31～11:1 マコ 1:40～45

1. マコ

vv.40-42 「さて、重い皮膚病を患っている人が、イエスのところに来てひざまずいて願い、“御心ならば、わたしを清くすることがおできになります”と言った。イエスが深く憐れんで、手を差し伸べてその人に触れ、“よろしい。清くなれ”と言われると、たちまち重い皮膚病は去り、その人は清くなった。」

神の国は悪霊の支配に対する戦いであり、イエスの宣教はその神の国の開始でありました。それは“時が満ちて”、遂に神が歴史の中に突入された“救いの訪れ”(ルカ 1:68 以下)であります。C.H.Doddはこれを“実現した終末論”(realized eschatology)という用語で表現しましたが、“開始した”という形容詞のほうが理解し易いかもしれません。

洗礼者ヨハネが獄中から弟子を送って尋ねさせたとき、イエスは答えて言われました。「行って、見聞きしていることをヨハネに伝えなさい。目の見えない人は見え、足の不自由な人は歩き、重い皮膚病を患っている人は清くなり、耳の聞こえない人は聞こえ、死者は生き返り、貧しい人は福音を告げ知らされている。わたしにつまずかない人は幸いである。」(マタ 11:4-6)

福音書は、イエスによるいやしや奇跡を、イエスによる御国の業の“しるし”として語っているのです。いやされた人が喜びのあまり、この出来事を言い広めた話は、そこから神の国の福音の正しい理解へと進まねばならないのだということを教えるためと理解すべきでしょう。…… イエスは深く憐れまれた(v.41)。だからキリスト者は同じ憐れみの心で医療を促進し、病気の存在しない世界を目指すべきだ……、と言うのでは、福音とは何の関係もない話になってしまいます。

2. 創

この世に病や悲惨があり、また争いと対立があるのは、それが罪の世であって、神に敵対しているからです。私たちはここで、その原因物語りを読んでいます。しかし私たちはこのテキストに対して幼稚な曲解をしてはなりません。“悪いのは人類の祖アダムとエバであって、その罪のおかげで何も悪くない現代人が犠牲になっている”と本気で考えるなら、間違っています。

このテキストの著者はアダムとエバではなくて、神の救済史を伝えたイスラエルでありました。救済史の舞台である人間の罪の姿を、原因物語りという形を借りて述べているのです。

イエスはこの世の病や悲惨を憐れんで、医療事業や福祉事業を開始されたなどと考えるなら、それは見当外れな理解です。「人の子は仕えられるためではなく仕えるために、また、多くの人の身代金として自分の命を献げるために来たのである」(マコ 10:45)というイエスの言葉の後半部分こそが、核心なのです。

聖書は、「御父は、わたしたちを闇の力から救い出して、その愛する御子の支配下に移してくださいま

した」(コロ1:13)と書いています。私たち人間は罪の世にあって神に敵対していましたが、「神は、キリストによって世を御自分と和解させ、人々の罪の責任を問うことなく、和解の言葉をわたしたちに委ねられたのです。」(IIコリ5:19) キリストの十字架の死は、私たちのためであり、それによって永遠の贖いを成し遂げられました(ヘブ9:12)。

“実現した終末論”(realized eschatology)には、イエスによる神の国の開始という過去があり、教会の時という現在があり、そしてキリストの再臨による神の国の完成という将来があるのです。「このように、わたしたちは信仰によって義とされたのだから、わたしたちの主イエス・キリストによって神との間に平和を得ており、このキリストのお陰で、今の恵みに信仰によって導き入れられ、神の栄光にあずかる希望を誇りにしています」(ロマ5:1-2)と書かれている通りです。

3. Iコリ

v.1 「わたしがキリストに倣う者であるように、あなたがたもこのわたしに倣う者となりなさい。」

多くの人(神の国の)益を得るために、イエスは命を献げられました。ですから、使徒パウロも多くの人(神の国の相続人となる)益を得るために奉仕することが、「神の栄光を表す」(v.31)ことであると考えていました。

私たちキリスト者一人一人を、天上の主イエスは「深く憐れんで、手を差し伸べて」(マコ1:41)くださっていることに、信頼し、感謝しようではありませんか。

ハレルヤ、アーメン。

2月22日 年間第7主日

イザ 43:18～25 IIコリ 1:18～22 マコ 2:1～12

1. マコ

v.9-10 「中風の人に“あなたの罪は赦される”と言うのと、“起きて、床を担いで歩け”と言うのと、どちらが易しいか。人の子が地上で罪を赦す権威を持っていることを知らせよう。」

イエスの宣教には、いやしや奇跡が伴っていました。私たちはこれを並行する二つの行為のように考えがちです。それで「どちらが易しいか」と問われて、ウーンと考え込んでしまいます。イエスの死と復活の後、初代教会はキリストが罪の赦しを与える(使 10:43、エフェ 1:7)神の力(Iコリ 1:24、ロマ 1:16)であることを知りました。イエスの宣教といやしの奇跡は一つの神の業であって(マタ 8:16 参照)、罪の赦しそのものであることを、福音書はこのテキストで語っているのです。

教会が使徒継承によって受け継いで来たキリストの福音は、「信じる者すべてに救いをもたらす神の力」(ロマ 1:16)です。宣教するイエスといやしの奇跡を行うイエスという、二人のイエスが存在したのではないように、教会には福音を宣べ伝えることと社会活動をするという、二つの独立した使命があるかのように考えてはなりません。明確に言うなら、「信じる者すべてに救いをもたらす神の力」(ロマ 1:16)でないような活動は、教会に委ねられた使命ではありません。

罪を赦すことは神に(v.7)、いやしの奇跡はイエスにと、まるで分業が行われているような誤った理解を、私たちは教会に持ち込んではいけません。小教区の活動が、いろいろな委員会を作ることによって進められる場合にも、その全体が“すべての人を信仰による従順へと導く”、“福音を告げ知らせる”(ロマ 1:5,15)ことなのだ、と理解しましょう。

2. IIコリ

v.20 「神の約束は、ことごとくこの方において“然り”となったからです。それで、わたしたちは神をたえるため、この方を通して“アーメン”と唱えます。」

教会は、イエス・キリストが「信じる者すべてに救いをもたらす神の力」であることを、“アーメン”と唱えることによって賛美告白します。この神の力は、洗礼によってキリストに結びつけられた民に注がれる聖霊によって、私たち教会の体験になったからです(ロマ 5:5)。

しかし、イエスのかつての宣教における力ある御業も、また現在の教会における聖霊の御業(ヨハ 20:22-23、Iコリ 12:1-11)も、キリストがすべての支配、権威、勢力を滅ぼして、父である神に国を引き渡される“世の終わり”(Iコリ 15:24)の、いわば終末的な先取りであり(典礼憲章 8)、私たちに与えられている聖霊はその保証なのです(v.22、エフェ 1:14)。

ですから、「わたしたちはこの地上に永続する都を持っておらず、来るべき都を探し求めているのです」

(ヘブ 13:14)。聖霊による神の力の働く時代(I コリ 2:4)は、ヨハネ福音書が“終わりの日”(6:39-40,54)と呼んでいる日までのことです。その日には、キリストは父である神に国を引き渡されるからです。

3. イザ

v.19 「見よ、新しいことをわたしは行う。今や、それは芽生えている。」

第二イザヤ(イザヤ書 40-55 章)において神ヤーウェは、世界の創造者であるとともに、また歴史の支配者として強調されています。そしてその歴史観の中心にイスラエルの贖いと全世界の救いが置かれました。かつて捕囚期以前の預言者が歴史の審判を告げたのに対して、第二イザヤは歴史の救済を語りました。「主は、とこしえにいます神、地の果てに及ぶすべてのものの造り主」であり、今や「主に望みをおく人は新たな力を得」る(40:28,31)、という新しい将来が芽生えているのです。

当時の第二イザヤは、多くの同胞と共に捕囚の民の解放を待ち望んでいました。しかし彼の預言ははるかに時代を超えて、終末的なキリストと教会を証しするものとなったのでした。神の側からの罪の赦しが繰り返して語られ(v.25, 44:22, 48:11)、最終的にはそれが主の僕の贖罪死に描かれて(52:13～53:12)、やがてイエス・キリストによる新しい契約に至るということを、だれが初めから予想出来たでしょうか(エフェ 3:5)。

イエス・キリストにおいて実現した神の約束の“然り”を賛美しましょう。「わたしたちはこの御子において、その血によって贖われ、罪を赦されました。」(エフェ 1:7) そして「神はまた、わたしたちに証印を押して、保証としてわたしたちのところに“霊”を与えてくださいました。」(II コリ 1:22) 「もし、イエスを死者の中から復活させた方の霊が、あなたがたの内に宿っているなら、キリストを死者の中から復活させた方は、あなたがたの内に宿っているその霊によって、あなたがたの死ぬはずの体をも生かしてください。」(ロマ 8:11) 福音は「信じる者すべてに救いをもたらす神の力」なのです。

ハレルヤ、アーメン。